

「維新流」「パソナ流」が浸食する関西と厚労行政

西村経済再生相が開けたパンドラの箱

神戸市議会議員・元国会議員政策担当秘書 岡田裕二

「覚醒剤を使われた方の出合いの場で講演しちやいけない」ということであれば、駅の街頭で覚醒剤を売り買っている人がいれば、そこで街頭演説するのもだめだという話でございませうか」

14年5月28日の衆院厚生労働委員会。民主党（当時）議員の追及に対し、若干言意が不明な反論をしたのは田村憲久厚生労働相だ。というのも当時、歌手のASKA氏が覚せい剤取締法違反容疑で逮捕されたことが報道され、一緒に逮捕された女性とASKA氏が知り合ったのが、東京・元麻布にあるパソナの政界関係者接待施設「仁風林」だったとされたのだ。仁風林には現職閣僚を含めて複数の政界関係者が出入りをしており、その中に田村氏の名もあった。田村氏は13年2月28日に仁風林に招かれて短い講演をし、食事を伴う供応を受けた事実を認めている。

新型コロナウイルス禍の長期化

に伴い、にわかに政界で存在感を増しつつあるパソナグループ（南部靖之代表）。西村康稔経済再生相が肝いりで進めた「持続化給付金」の運営や、一斉休校に伴う保護者の休業助成金の申請業務等を一手に引き受けることにより、パソナグループは過去最高益を更新した。20年5月期の純利益5億9400万円に対し、21年5月期は62億円と、前年比10倍強という利益を叩き出している。

「バックには党本部」

パソナグループが本社機能を移転する候補地として白羽の矢が立ったのが、西村氏の選挙区でもある淡路島だ。そしていまや「パソナ島」とも呼ばれるこの島を擁する兵庫県の県知事選が、県政史上初の自民分裂選挙という未曾有の波乱・混乱をもって幕を閉じた。昨春秋、コロナ禍の深刻化のな

かで、20年もの長期にわたり兵庫県知事として君臨してきた井戸敏三氏の評判は地に落ちていた。20年10月には、2000万円以上するトヨタの高級車「センチュリー」に公用車を切り替えたことが発覚。センチュリーを公用車としているのは兵庫県だけではなく、しかも切り替えたのは1年以上も前のことであったが、ある日突然、一部のマスコミが火をつけ、瞬く間に、近年類を見ないほどの大バッシングを招いた。

それまで去就を明言していなかった井戸知事は、この大炎上を受けて今季限りの引退を表明。しかしそんななかであったため、井戸氏の後継者と目されていた金澤和夫副知事を次期県知事候補とすることに対し、県議会内で異論が沸き起こり、選挙まで1年を切った段階で「候補者未定」という、前代未聞の事態に陥った。そこで同年11月、自民党の二階

俊博幹事長、西村氏、南部靖之・パソナグループ社長が永田町の1室に集い、カジノを含む統合型リゾート（IR）に猛反対していた井戸知事の後継者を排除し、知事候補として、総務省事務次官の黒田武一郎を内定。二階氏からの強い申し入れにより、菅義偉首相も黒田候補案を了承した。

しかし、一方で総務省から大阪府に出向し、財政課長を務めていた齋藤元彦氏が、県知事選に出馬する意向で松井一郎維新代表や吉村洋文・大阪府知事に相談していたことが明らかに。保守票分裂を危惧した黒田氏が立候補を辞退した。

重ねて県議会も、当選7・8回の長老議員と、県連幹事長・政調会長ら中堅議員との激しい内部対立を抱えていた。結局迷走の果て、県議団として金澤副知事を県知事候補として出馬要請するに至ったが、中堅議員らは反発。その渦中

に悪魔の囁きをしたのが西村氏だった。

「金澤では勝てない。維新の齋藤に乗れ。仮に『造反』だと認定されても、俺が守ってやる。なぜならバックに党本部がついている」

この囁きを受けて中堅議員らは自民会派を飛び出し齋藤氏に出馬要請。自民を分裂させ、維新を呼び込むパンドラの箱に、西村氏が手をかけた瞬間だ。今年4月6日に維新が齋藤氏の推薦を決定し、長老派の県議が党本部に猛抗議するなか、4月12日に自民党も異例のスピードで推薦を決定した。二階氏の命を受けた菅首相がわざわざ齋藤氏を出迎え、マスコミを集



パソナの南部社長と仲睦まじい西村大臣（西村氏のTwitterより）

めたうえで2ショット写真を撮るなど、地方の首長候補にしては異例の厚遇ぶりだった。知事選期間中は維新・吉村旋風が吹き荒れた。自民党の下村博文政調会長や丸川珠代五輪担当相が応援弁士の際には閉古鳥が鳴いていた神戸市の中心街・三ノ宮も、吉村洋文知事が宣伝車に上るや否や、黒山の人だかりとなり、黄色い歓声が上がった。7月18日の投票日には、午後8時の投票締め切りと同時に当確が報じられ、県知事選は齋藤氏の圧勝に終わった。

熱狂的な維新人気に対し、「維新が大阪でやっているような政治を兵庫で進めたい」「維新のマインドを取り入れていく」と明言して呼応する齋藤氏。「維新流の政治を進めるといふ約束を反故にするなら次の選挙で齋藤氏と戦う」（松井代表）と圧力をかける維新。そして関西政界のドンとして君臨するために、大阪と兵庫を掌握したい、和歌山が地元の一階幹事長。三者の思惑が一致し、兵庫県は維新の植民地として割譲されるに至ったことになる。

そのトロイカの尻尾をつかみ、漁

夫の利を得たのがパソナと西村氏だった。大阪万博（25年）への全面協力を公言する齋藤氏に、維新から突きつけられたもうひとつの要求が大阪IR構想だ。すでにパソナは「パソナ島」と化した淡路島の大型リゾート化に着手している。「ニジゲンノモリ」「ハローキティスマイル」などの巨大アミューズメントパークのみならず、政界関係者接待施設「春風林」なども建設済みだ。

医療機関支援プロジェクトの暗澹

そして西村氏はこのパソナの接待施設の常連であり、淡路島に200人もの人材を派遣する「町づくり人材育成事業」など、多くのパソナの政府関連事業を地元で誘致していたことが、20年7月16日の参院予算委員会などで明らかにされている。

「パソナ太郎」と例示された履歴書を配布していた大阪市役所を筆頭に、関西で進む行政の外部委託は維新イズムの1丁目1番地であり、そもそも維新はパソナのような企業とは相利共生の関係にある。

一方で、パソナグループは、コロナ禍における「医療機関支援プロジェクト」を今年2月から開始。公式HPの記載には、「医療機関の皆様の事業運営をパソナグループの総合力と事業ノウハウを結集し、『人材・環境・生活』面から支援」

「慢性的に不足する医師・看護師をはじめ、医師事務作業補助者や看護助手などの人材サービスをパソナが提供」

「未経験から医師事務作業補助者や看護助手にチャレンジできる人材育成プログラムを実施」などがある。

冒頭の田村氏のパソナとの癒着の追及は、「ホワイトカラーエグゼンプション」「残業代ゼロ法案」などとも呼ばれた法案が付託された日のやりとりだ。今後、これら医療従事者の外部委託を奨励する流れに、厚労省もシフトしていくだろう。医師ですら例外ではない。

しかし、「医は仁術」を守り通すために必要なものは行政改革でも経営哲学でもなく医療倫理だ。「維新流」「パソナ流」に屈しないヒポクラテスの志を、医療機関経営者・医療従事者には強く持ち続けてもらいたいと願うばかりだ。